# 26P-pm230

日本における寄生虫感染の治療と対策に関する史的研究

○牧　純[1], 西岡　麗奈[1], 関谷　洋志[1], 玉井　栄治[1]([1]松山大薬)

[目的・方法]薬学史教育の構築に有益な“日本における寄生虫感染の治療と対策に関する史的研究”を行った。関係資料の収集(書籍、文献、ネット等)、博物館・遺跡の視察を通して、まず日本の有史以来の寄生虫病で土着のものと輸入されたものに分け、更に夫々原虫と蠕虫(線虫、吸虫、条虫)につき検討し、特徴となるキーワードの抽出と要約を試みた。治療及び対策については、時代的に「祈祷」→「漢方」→「合成薬」及び「生活環の遮断」に注目した。

[結果・考察]①土着寄生虫-縄文遺跡のトイレ跡と考えられる所より種々寄生蠕虫の虫卵が見つかっており、鞭虫(線虫の 1 種)などは古くて新しい問題と再認識される。蠕虫感染患者数は減少、新種発見により種類は増加傾向にある。WHO の所謂 3 大寄生虫の糸状虫、住血吸虫、およびマラリア(原虫)が日本で昔から猛威を振るっていたが、優れた治療薬の創薬以前に、「生活環の遮断」によりその根絶に成功した。キーワードは「農作業」「生鮮食品の生食」「蚊の刺咬」等が挙げられよう。②輸入寄生虫はマラリア、エキノコックス、広東住血線虫などが著明である。その他、症例報告にあったものはロア糸状虫、タイ肝吸虫はじめ多数挙げられる。キーワードを含めた特徴「明治維新後の本格的な開国」「第二次大戦後以来の国際交流の活発化」が大きな要因として目立つ。しかし第一と第二の中間宿主を必要とする吸虫類の輸入感染症としての定着化は調べた限りでは存在しない。③治療方法と対策-治療は上記の発展 3 段階が一応認められそうだが、詰めの検討が必須である。民間療法（ゲテモノの生食）による寄生虫感染も珍しくない故、「治療薬学」と並んで「予防薬学」の発展が望まれる。